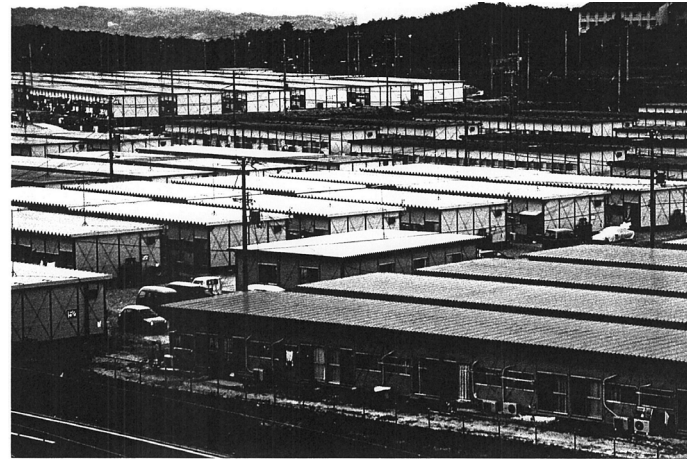


阪神・淡路大震災から 20 年

『長田からの手記』

協会神戸支部は震災復興長田の会への参加を中心に、現在まで復興の課題に取り組んできた。震災 20 年にあたり、長田区で開業している会員から寄せられた手記を紹介する。



右写真：住民の運動により市内各地で多くの仮設住宅が建てられた

阪神淡路大震災 20 周年『長田からの手記』によせて

神戸朝日病院 金 守良

十年一昔という言葉がある。あの阪神淡路大震災から二十年が過ぎた。二昔が過ぎたわけである。月並みであるが、感慨無量である。ただ、懐古趣味だけでこの 20 年間を振り返るのではなく、一市民として、一医療人として震災復興過程の検証をすることが重要と考える。たとえば、この 20 年間、震災直後から市政が進めてきた神戸空港の現状はどうかをみると、赤字体質からの脱却は容易ではないように見える。又、2 万人を超える雇用の捻出を展望し、基幹産業として位置付けられた医療産業都市（構想）の現状をみると、当初の目標とは程遠い。阪神淡路大震災後、日本では、新潟県中越地震、東日本大震災などの大地震が相次ぎ、その地域の復興は道半ばである。

そうした中で、震災復興モデル都市神戸ということばが聞かれる。三宮付近やハーバーランドのきらびやかな景観をみると、その言葉は現実味がありそうに思えるが、そのことばは長田区に存在する医療機関の長としての私の立場からは少し違和感のあるのも事実である。

まず、第 1 に人口の推移である。震災前 13 万 5 千人あった人口は、その後、減少したまま前値には戻らない。2014 年 10 月 1 日現在 9 万 8391 人と 10 万人を切っており、その回復はすすんでいない。

第 2 に産業の復興の現状である。例えば、地場産業であった、在日コリアンもその生産の一角を担っていたケミカ

----- (3 面に続く)

(2 面から続く)-----
ルシューズ産業の衰退は著しい。

又、商業の面でも低迷が続き、行政主導で行なわれた大正筋商店街の再開発ビルの現状（林立する高層ビルとはうらはらのまばらなシャッター通りの様相）はその象徴である。

第 3 に医療機関の現状をみると、医

師会員数からみると、震災当時 A 会員は 152 名であったが、現在、111 名（2014 年 10 月現在）であり、その数の回復の見通しはない。

長田区の完全復興ののちにこそ、震災復興モデル都市として、神戸が全国を勇気づけることができると考える。

震災の経験を社会の礎に

江原内科クリニック 江原重幸

震災から早いもので、来年で 20 年となるそうです。当時の自分は研修医 1 年目の終わりで、震災を西脇の地で経験しました。家族は被災し連絡が取れず、日々の仕事に従事していたその日の午後、実家を含む周囲の数戸が倒壊している様子を空撮映像でテレビから目の当たりにし、被災地に向かいました。上司に相談してから向かったのですが、後から上司より「患者様を他人に預けて行くとは何事か」とこっぴどくしかられた事を思い出します。

震災後も様々な問題が起こり、大きな社会問題となりました。それらの顛末は皆さんご存知の如くです。単に先送りされただけのものや、首をかしげる物もありましたが、私たちはそれらの問題を乗り越えてきました。

震災から立ち直り日々の生活を始める人、震災に取り残され日々を踏み出せない人、立場も余力も異なる多くの人たちの間で様々な軋轢を生じました。援助の手をさしのばす方、それを受ける人々、公的であれ私的であれ、それぞれに思い

が有り、言い分が有りました。色々な話に一喜一憂し、自分なりの思いで物事を見ていたつもりです。当初は助け合いの精神の元、様々な人のためにいろんな事をしました。しかし今思うとやはり厳しい見方に幾分偏っていた時もあったと思います。身を削って努力していれば、周囲も努力するのを当然と思い、ついつい人に厳しくなる。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」と夏目漱石の一説が思い出されます。「余裕が出来て初めて人に優しく思える」というのは本当に自分が凡人であるのだなと感じます。

震災の年に生まれた人は来年成人します。ボランティアに来た人にもその後の 20 年があったと思います。あつという間でしたが「あの時の思い」は必ず後の、そして今の人々の心の中に息づいていると思います。あれだけのことが有り現場で必死に情熱を燃やし乗り越えたのですから、その経験は社会の礎になるものと思います。

20 年目の新長田

神戸協同病院 上田耕蔵

「長田区は震災前と比べどう変わったか？」これへの回答は住民に聞いた方が早い。患者さんに聞いた「震災前と今はどう違う？」。

「あかな（再開発の）地下がガラガラや、店がない。それから人が減った。」新長田の変化はこの 2 点で表現できるようだ。

新長田駅南側には再開発ビルが林立している。みかけ上は未来都市の片鱗？を感じ

させるが、再開発ビルは大きく作り過ぎた。店舗は一部に地下と 2 階があったとしても大半は 1 階だけで十分だ。2 階部分の通路や道路をこえた橋などは不要であった。実態、賃料を著しく安く設定して業者を誘導しているが、テナントの半分以上は空いたままである。商売が成り立たず自分の店舗を売ろうとしても賃貸料が安いので買う人はおらず、売れない。また再開発ビルの住居は管理料（共益費）を安くして販売している。元の住民・店舗の管理料は高いまま（9 倍）で、負担をかぶったままである。（裁判が起きている。）

確かに再開発ビルは長田区の人口減を最小限に食い止めている効果はあるようだ。今でも駅南側にマンションが建設されると、安いのと便利なせいかすぐ売れるようだ。入居者は地元の人より外から



震災当時の様子 地震により住宅は倒壊

来ているようだ。あるいは中年に長田から西神に移ったが、高齢になって戻ってきている人もいと聞く。飲み屋も駅周辺に集中するようになったようだ。しかししょっちゅう店は入れ替わっている。消費する人口が減って苦戦しているのだろう。

比較的最近のショックな出来事は大丸の撤退であった。新長田の隠れた自慢であった大丸も 13 年 1 月に撤退してしまった。患者さんは嘆いていた。「あとは若者向けの店に替わったが、それまでの有名店はなくなった。地下にいけば、美味しい店がならんでいた。それが東急になり、なくなってしまった。」東急の店舗は圧倒的に安普請である。普通のスーパーより背の高い灰色の陳列棚が林立している。機能一色で作られている。-----（5 面に続く）

（4 面から続く）-----
一般スーパーの風情も感じられない。先ほどの患者さんは「まるで監獄みたいや」と言っていた。しかし不思議な物で 1 年 2 年と経つうちに眼が（脳が）慣れてきた。監獄には見えなくなった。慣らされてしまった。

震災後、再開発地区周辺ではしばらくは自宅の再建は続いたが、やはり空き地がそこに残ってしまった。その駐車場がどうしたことか最近急に times に変わっていている。しかしまちづくりは続いている。真陽地区では防災福祉コミュニティが熱心に活動している。津波発生時の避難行動の徹底（津波に伴う

火災がつきもののため、高いビル避難ではなく JR 線路より北側への避難が呼びかけられている）や幼稚園児の避難訓練などが行われている。

地蔵盆も盛んである。これほど子供がいたのかとも思える程の多数の子供達が地蔵さんを練り歩いてお菓子をもらっていく。地蔵盆の準備と当日お菓子を配るのは各地区の高齢者である。患者さんに「子供がすごく多いね」と聞くと「他の地域へ引っ越した家族の子供たちも集まってくるからね。でもちっちゃい子供らにお菓子を配るのは面白いわ。」と答えてくれた。（この患者さんは疲労のため持病の心不全が悪化し入院となった。）

阪神大震災を振り返って

松田眼科医院 松田弘子

あの大きな震災を経験し、もうこんなことはないだろうと思って 20 年。毎年、毎月、色々な事件や時事が起こっています。天災も多く、今年も大きな台風がきましたし、雨も 200 ～ 300 ミリ / 時の豪雨もきます。雨も以前の梅雨時期のようにシトシトとは降らなく、バーッと一時期に降り、その時は何センチ～何十センチの水の流れになります。家屋に浸水やガケ崩れが起こります。長田の町も殆ど建て返りました。私の医院も全壊し、平成 9 年に建て替えました。今はしっかりした建物で、少々雨にも台風にも抵抗しています。

しかしそうすると、私自身の気力の低下・体力の低下・老化が気になり、息子

が他の場所で開院しているのをみると、ここへは戻らないのだろうと思い、医院を閉める日を考えています。気力・判断力が衰えたらいけないと思い、毎月積極的に生きています。セミナー・学会・医師会の行事は出席し、医師としての色々な知識を取得し、活発に動いております。眼科専門医の単位も 5 年で取得すべきを 3 年で取得し、色々な会合にも出席しています。

しかし、長田区の人口は激減し、今後は 7 万 5 千人も切る状態です。開業（医師の）する人も殆どいなくなりますが、既存の開業医は必死になって生き残りをがんばっています。

長田の町の小さな映画館

神戸協同病院 石川靖二

震災後の慌ただしい日常の診療、一日一日が過ぎていきましたが、被災地のど真ん中にいる自分たちに“いったい何ができるんだろう？”と、考えるようになりました。

以前から、高齢の患者さんにチャンバラ映画を見てもらって、その喜ぶ姿を見たいと思っていました。そんな思いつきから、映画

サークルの活動はスタートしました。震災の年の病棟の七夕会で、嵐寛寿郎・美空ひばりの「鞍馬天狗角兵衛獅子」が 1 本目。

その後、病院内の例会として映画会は継続、ポスターを張り出したり、会報を配ったり、または口コミで映画好きの患者さんが、参加するようになりました。仮設住宅での一人暮らしのため淋しいとか、映画を見に長田に来る事が嬉しいとか、映画自体を楽しむ以上に人と人との交流の場として、このサークルを大切に考えてくれる人が多いようでした。スクリーンの前では、医師・職員と患者という区別なく、まったく対等な立場であることが、我々にとっては嬉しいことでした。

サークル発足時から、「映画の出前がしたい」という気持ちが有り、訪問看護科の協力で、1995 年 12 月より仮設住



再開発で新たなマンションが建つ中、住宅再建できずに残る更地

宅での「ふれあい映画会」が始まりました。

みんな画面に食いるように見入っています。頼りなさそうに見える高齢の方ばかりですが、その集中力、インテリジェンスの高さには敬服してしまいました。震災後 5 年ほどで仮設住宅が閉鎖され、その後は復興住宅に活動の場を移して、映画会を継続しました。地域での映画会は 20 カ所ほどで数十回行われました。

少しブランクはありましたが、最近まで月例会は続けられ、出張映画会を含めると、300 回近く上映したことになります。毎月、気心の知れた仲間と映画を見て世間話をして、私にとっても癒しの時間となっていました。しかし参加者のほとんどが高齢となり、夜道を杖をつきながら帰る姿を想像すると、そろそろ潮時かと考え、私の還暦を区切りに昨年末、----- (7 面に続く)

(6 面から続く) -----
「チャップリンの独裁者」をもってサークルの解散となりました。

「病院は地域の砦」という震災時に痛感したことはかなり、希薄になりました

が、患者さんと一緒にスクリーンに向っている時、病院は地域に根ざしていることを体感できました。長田の町で、震災後続いた“小さな映画館”での交流は、宝物でした。

震災から 20 年 政府の福祉政策の充実を

大畑歯科 大畑登代

平成 17 年 1 月 17 日 AM 5:45、限りなく長く感じた 19 秒間の揺れ。

あれから 20 年も経ったのですね。“なんとかこの地で再建を”と願った強い気持ち。診療所が再建出来た時の“さあやるぞ”といった当時の前向きな気持ちをなくしている自分に啞然としてしまいました。

震災時は、“これぞ人生最大の危機”と思っておりましたが、今現在の方が診療所の経営は難しくなっております。当時もバブルが弾けたばかりで経済は下向きでしたが、世の中はもう少し明るかったように思います。

開業以来 30 年間、診療所を支えてくれた妹 (H26 年 2 月 2 日、肝がんのため死去) をなくし、ちょっぴり弱気になっておりましたが、仕事は続けたい、こんな私でも頼りにしてくれる患者さんがいます。開業当時から通ってくれている患者さんは、ほとんどが年金生活者になっています。

現役のころは気にならなかった治療費が負担になっています。

入れ歯が割れた時、「このままくっつけてほしい」と希望する患者さんが増え



震災後に建てられた仮設住宅の様子

ています。新しくした方がいい場合でも、やむをえません。すぐに割れるのがわかっているのに修理せざるをえません。冠やブリッジが外れた時、絶対新しく作り直すべきケースでも「なんとかつけてほしい」と望まれる患者さんが多くなっています。これでは医療の後退です。

現在、政府が採っている福祉政策は、弱者を追いつめています。さらに医療者側も追いつめられています。

政府は消費税が 10% になっても、医療機関を見捨てようとしています。私の診療所の継続の鍵は、政府の福祉政策です。公約どおり消費税を福祉に振り向けてください。このままでは診療を続けることができません。